

第四回須賀敦子翻訳賞授賞式

2020年12月9日（水）

総 評

選考委員各氏のコメント

受賞者スピーチ

総評

第4回を迎えた本賞の選考は、当該2年間（2018年7月～2020年6月）に刊行された95点の内、各選考委員からの推薦のあった6点（訳者5名）を最終候補として、去る11月3日夕刻、オンラインにより最終選考を行った。

当該候補作は以下のとおり。

- ・長野徹訳、ディーノ・ブッツァーティ『現代の地獄への旅』『怪物』（東宣出版）
- ・竹山博英訳、『プリーモ・レーヴィ全詩集——予期せぬ時』（岩波書店）
- ・萱野有美、フランチェスコ・ビアゼットン『美しい痕跡——手書きへの讃歌』（みすず書房）
- ・國司航祐訳、ジャコモ・レオパルディ『断想集』（幻戯書房）
- ・菅野類訳、ヴィットーリオ・アルフィエーリ『アルフィエーリ悲劇選 フィリッポ・サウル』（幻戯書房）

訳業6点は3種に大別できる。

- 1) 訳者がそれぞれ多年にわたり翻訳紹介につとめてきた20世紀作家の短篇選と詩集成。
- 2) 現代アーティストによる手書き（文字）をめぐるエッセイ。
- 3) イタリア・ロマン主義の先駆的作家と中核的作家による古典作品（前者は劇作選、後者は哲学的散文111篇）。

まず各委員が順次、候補作6点についての評価を述べたのち、討議に移った。授賞作品の決定に際しては、本賞創設以来護ってきた選考規準

- ① 日本語の出来栄
- ② 作品自体の価値と翻訳紹介の意義
- ③ 訳者による原作に関する綿密かつ緻密な調査

3点に照らして各候補作の充足度をみるとともに、過去3回の選考結果が示唆する本賞の方向性をも確認したうえで討議が進められた。

その結果、規準すべてについてもっとも充足度の高い訳業として、國司航祐氏の手になるジャコモ・レオパルディ『断想集』を今回の授賞作とすることで全選考委員の一致をみた。

レオパルディの日本語での翻訳紹介は、脇功氏による全詩作品『カンティ』訳と柱本元彦氏による哲学的散文『オペレッテ・モラーリ』全訳を合わせた刊本

(名古屋大学出版会、2006年)をもって一気に前進をみたが、600有余頁8000円の書物が読者の手許に渡ることは如何せん容易ではなかった。ゆえに、いまだイタリア文学を代表する詩人思索家は未知の存在のまま、日本語読者の到来を待っているというのが現状である。それでも、近年ふたりの若い研究者がこの文学者を主題に博士学位論文を著すという出来事に、喜ばしい変化の兆候を看ていた者としては、今回、そのうちのひとり國司氏によって、『断想集』の邦題のもと、この詩人思索家の絶筆にして歿後刊行物が初めての原典全訳というかたちで読者の手に届くようになったことを心より歓迎したい。

前述の柱本訳による哲学的散文以上に、詩人思索家の悲喜劇性を際立たせる内面の記録ともいえる111篇の省察を、國司氏は丁寧に、その思索の奥底に分け入るようにして掬いだしている。ときに原文の構造を踏み越え組み替えることはあっても、思索の展開を壊すことは生じない——それがおそらくこの訳業の最良の資質であろうと評者は考えている。

ここでひとつ私事に立ち入ることをご寛恕願いたい。レオパルディと漱石、芥川の因縁について聞かされたのは1973年春、わが恩師のひとり脇功氏による演習のさなかだった。『虞美人草』と『椎の葉』におけるレオパルディの登場を知って、ふたりの作品をあらたな眼で急きき^せって読みなおした日々をいまも懐かしく思い出す。2017年12月に逝去された脇先生に、先生の撒いた種はこんなふう^よに大きく芽吹いていますよと、ご報告できたらと、叶わぬ夢が過ぎる。

最後に、國司航祐さんが今後いっそう精進され、翻訳に研究にとその成果を読者に届けてくださることを期待するとともに、次回の本賞にまた優れた訳書が数多く寄せられることを願って総評を閉じる。

選考委員長 和田 忠彦

選考委員各氏のコメント

思索と詩作、哲学とポエジーのあいだを揺れるジャコモ・レオパルディ特有のスタイルを瑞々しい日本語に置き換えようとした努力の結晶である。ペシミズムとシニシズムをまたぐような多彩なモラリストとしての彼の顔がよく伝わってくる。やや硬いところが残らなくはないが、若さの故であろう。今後のさらなる訳業にもまた期待したい。くわえて、こうした埋もれた著作の刊行を後押しされた書肆にも敬意を表したい。

岡田 温司

内容の面白さ、文学史上の意義、造本も含めた全体の構成など、候補作それぞれに見るべきところがあって楽しく選考できた。とはいえ肝腎なのはやはり訳文。國司さんのレオパルディ訳は、諧謔と逆説をはらんだ文章の味わいや論理性がよく伝わってきて、「この人が訳してよかったな」と思える瞬間が何度もあった。解説も読み応えがあり、作者代理・読者代表両方の役割をよく果たしている。知られざる古典を積極的に出している幻戯書房もあわせて賞賛したい。

柴田 元幸

受賞作は、読みやすさを重視したという言葉どおり、訳文は明瞭で読みやすい。ことにレオパルディの文体の特徴を考慮した上で、長文を意識的に分割したことや、日本文学への影響を論じるために漱石の作品を引用しているあたりに工夫が見られる。敢えて言えば、帯にある「寛容」、「不寛容」の問題を今日のテーマとして論じてほしかった気がするが、訳書としては要求し過ぎかもしれない。内容や文体への目配りなど、全体としてバランスの良い訳書だと思う。

野谷 文昭

19世紀イタリア文学の巨匠を、日本の現代文脈に置き換える巧みな技術は評価すべきである。訳文は忠実だけでなく、訳者自身のレオパルディ作品に対する感情が、日本の読者にうったえかける側面もある。古典的なものを翻訳する才能として無限の可能性が窺えるので、ぜひその道を歩み続けてほしい。

シルヴィオ・ヴィータ

受賞者スピーチ

私が初めてレオパルディに出会ったのは、今から 20 年ほど前のこと、私が大学 3 年生の時だったと思います。私はその頃、イタリアの文学というよりかは言語に興味があって、ダンテ、タッソ、ガリレオなど、今考えてみるととても貴重な講読の授業よりも、イタリア人 講師の会話の授業や文学講義の方が好きでした。イタリア人の先生の授業は、私の語学力では完全に理解できるものではありませんでしたが、何やら分からないことでも、情熱をもって伝えられるととても刺激的なものに感じられました。先生はその授業の中でレオパルディについて熱く語られました。イタリア文学史の中でペトラルカと並んであるいはそれ以上に優れた詩人はレオパルディしかいないとおっしゃっていました。しかし私はレオパルディという人物もましてはその作品も、全く知りませんでした。

ある日のことです。先生は *A Silvia* という非常に有名な作品を紹介されました。そして私に尋ねました。國司、聞いたか、アコーディオンのようなメロディだったろう？それが分かるか？..... 私の耳にはそれがアコーディオンのようなメロディには全く感じられませんでした。それでも、イタリア人の耳にとってはこの詩がアコーディオンのような響きになるということを知って非常にワクワクしました。このような詩を理解、いや感じとれるようになりたい、そう思いました。

それから学部の 2 年間では、イタリア文学に関する知識があまり身につかず、文章読んで分からないことが多かったことを覚えています。だから修士課程に進んでもっとイタリア文学のことを研究したいと思うようになりました。研究対象はクローチェという哲学者に定め、レオパルディはひそかに愛読し続けることにしました。

さて修士課程入ってから、私は 1 つの壁にぶつかることになります。私は、翻訳がとても苦手だったのです。指導教官にも他の学生にも、ことあるごとに私の訳文がまずいことを指摘されました。修士論文の研究発表の時でしょうか、國司なんでおまえはそんなに翻訳が下手なんだと当時の指導教官に質問されて当惑しました。そんなこと当人に聞かれても分かりませんよと心の中でつぶやきながらも、私の「翻訳が下手な理由」を少し考えてみました。そして私は答えました。先生、私はイタリア語の文章を読むとき、イタリア語そのものを理解したいと思っていて、それが日本語でどのような文章になるのかということには興味がないのです、と。

こうして、イタリア語を日本語に翻訳するという作業が嫌いなまま、修士課程に通いました。徒歩で 20 分ほどある通学路で、毎日、歩きながらレオパルディやダンテを暗唱しました。当時、その大学の環境は、私にとってはあまり心地よいものではなかったかもしれません。そこで少し外に目を向けようと思えば

る時東京でスピーチコンテストというものがあることを知りました。私が修士課程の頃ですから今から 15 年以上前のことでしょうか。そう、私はイタリア文化会館に来て、自分の気持ちをイタリア語で発表したのです。その時私が選んだのは、日本でなぜイタリア文学がそこまで人気を得るに至っていないのかというテーマでした。今考えると、日本のイタリア文学研究者の先生方にとっては、たいして目新しい題材ではなかったはずですが、イタリア人の先生方からは割と良い評価を頂けたことを覚えています。

スピーチのあとの質疑応答で、イタリア文学が日本に紹介されていないという現状があつて君はそれにどう対処すればいいと考えるか、と尋ねられました。少し考えこんだのち、私は、イタリア文学をもっと日本に紹介するためには翻訳をしなければいけないと答えました。そして無意識に挙げた名はレオパルディでした。実はその当時、脇先生が翻訳された『カンティ』と柱本先生が翻訳された『オペレッテ・モラーリ』が合冊で出版されたばかりだったのですが、それは、レオパルディというイタリアで最も愛された作家の主著が、21 世紀になってようやく完訳されたということを意味していました。ですから私は、レオパルディの他の作品も邦訳されなければならない、と考えるようになっていたのです。

その頃から、イタリア文学の研究に携わる人間の一人として、その魅力を日本の読者に伝えるために働く必要が私にもあると考えるようになりました。それから、徐々に翻訳のまねごとをするようになり、同時に日本の文学作品をたくさん読みながら日々作文の修行をするようになりました。その一方で、イタリア語をイタリア語のまま理解したいという気持ちは続いていました。イタリア語をイタリア語のまま理解した上で、それをどうにか日本語に変換することはできないだろうか。

この難問にヒントを与えてくれたのは、意外なことにイタリア語で作文するという行為でした。博士課程に入ってナポリに留学し、イタリア語で文章を書く機会がたくさんあり、その作業を通じてイタリア語という言語が持つそれまで思いもよらなかったような様々な特性を理解することが徐々にできるようになりました。イタリア語で読むときにイタリア語で書くことを考える、そしてそれを日本語で書くときに日本語で読むことを意識する、この四つの作業を行ったり来たりしながら翻訳をすることによって、一つの固まった形ではなくて、さまざまな表現の可能性が開けてくるということが少しずつわかってきました。

それから、博士課程での研究成果をまとめ、博士論文を執筆し、今もお世話になっている 京都外国語大学に就職することができました。しかし私はまだ翻訳を発表したことがありませんでした。今から 3 年以上前のことだったと思いますが、飲み会の席であるお誘いを受けました。自国では重要とみなされている

が、日本ではあまり知られていないヨーロッパの作家・作品を翻訳するシリーズを作りたい、その企画にはとくに若手研究者に参加してもらいたいが、君もどうだ、というお話しでした。私はその時 まだレオパルディを専門として研究していなかったのですが、お声がかかった時点でレオパルディならぜひ引き受けよう決めました。レオパルディの遺作『断想集 *Pensieri*』を提案すると、ありがたいことに、その企画を受け入れていただくことになりました。

イタリアで最も愛された作家であるレオパルディを翻訳するということは、非常に恐れ多い試みだったのですが、私は翻訳者として名が売っていたわけでもなかったのでこうした試みにあまり気負うことなく挑戦することができました。しかし、実際に翻訳の作業に取り掛かってからは、困難の連続でした。まず、読んで分からない箇所がある。理解できても、どうも翻訳できないところが出てくる。意味の伝わる訳文になっても、レオパルディの美文とはかけ離れたまじい文章になってしまう。しかし、一度引き受けた以上、とにかくやりきるしかありません。何度も何度も原稿を見直し、編集担当の中村健太郎さんにアドバイスをもらいながら、どうにかこうにか「伝わる」文章にするというところにはたどり着くことができた気がします。原文の美しさを十分に伝えられるものにはなりませんでしたが、幻戯書房の方々に美しい装丁を整えてもらい、今年四月本書が出版され書店に並んだときは、これまで感じたことがないような喜びを感じました。

さて先日、この作品が須賀敦子翻訳賞を受賞するという知らせが届いた時は、とても驚きました。初めての翻訳で、まさかこのような光栄な賞をいただくことになるとは！文字通り、身に余る思いです。それでもこういうことが成し遂げられたのは、ひとえに周りの方々のおかげだと心の底から考えています。まずは幻戯書房の方々、とりわけ編集の中村健太郎さん。またこの話を紹介してくれた学友であり尊敬する研究者である霜田洋祐くん。さらに、複数名いらっしゃいますので個別に名前を挙げることはできませんが、京都大学大学院でいつも丁寧に添削指導してくださった先生方、京都外国語大学でいつもお世話になっている先生方、職員さん、そして学生さんたち、関西で一緒にイタリア文学研究を盛り上げてきた関西イタリア学研究会の仲間たち、レオパルディ研究の尊敬すべき先輩である古田耕史さんを始めとするイタリア学会の先生方や研究仲間。そして何より、私の両親、妻牧子、妻のご両親、最愛の息子健人。彼らがいる何気ない日々の生活が、私のなによりの支えだったことは、改めてここに申しておきたいと思います。

最後に、やはりレオパルディの言葉を紹介しておきたいと思います。実はレオパルディもまた、一人の翻訳家でした。レオパルディは、詩人としてデビューする前に古代ローマの詩人ウェルギリウスの叙事詩『アエネーイス』の第2巻の

翻訳を公表していたのですが、その序文に記された彼の言葉はとても印象に残るものです。今からその一節を引用しますので、『アエネーイス』のところに『断想集』を、ウェルギリウスのところ「レオパルディ」をそれぞれ置き換えながら、聞いてみてください。

Lettor mio, dà un'occhiata alla mia traduzione, e se non ti piace, sì baistemma il deturpatore dell'Eneide, che sel merita, e gettala via; se t'appaga, danne lode a Virgilio, la cui anima hammi ispirato, anzi ha parlato solo per mia bocca.

我が読者よ。拙訳を一読し、もし気に入らなければ、『アエネーイス』を台無しにしてしまった訳者を必要だけ罵倒し、本書を投げ捨てたまえ。だがもし満足できるようであれば、ウェルギリウスの方に賛辞を送ってほしい。私に靈感を与えたのは彼の魂であり、いやむしろ、私の口を通じてまさに彼の魂が話したのだから。

國司航佑

Premio Suga Atsuko per la traduzione
4^a edizione 2020
9 dicembre 2020 (mer.)

Commento generale
Commenti della giuria
Discorso del vincitore

Commento generale

La giuria del Premio Suga Atsuko, giunto alla sua quarta edizione, ha valutato 95 opere pubblicate tra luglio 2018 e giugno 2020, selezionandone sei (con cinque traduttori) per la fase finale, che si è svolta online la sera del 3 novembre.

I lavori selezionati sono stati i seguenti:

- Viaggio agli inferni del secolo e Il mostro*, di Dino Buzzati, tradotti da Nagano Tōru (Tōsen Shuppan)
- Ad ora incerta*, di Primo Levi, tradotto da Takeyama Hirohide (Iwanami Shoten)
- La bellezza del segno. Elogio della scrittura a mano* di Francesca Biasetton, tradotto da Kayano Yūmi (Misuzu Shobō)
- Pensieri*, di Giacomo Leopardi, tradotto da Kunishi Kōsuke (Genki Shobō)
- Tragedie scelte di Vittorio Alfieri. Filippo Saul*, tradotto da Kanno Rui (Genki Shobō)

Questi sei lavori di traduzione possono essere divisi in tre tipologie:

1. Raccolte di racconti o poesie di scrittori del XX Secolo di cui i traduttori hanno già presentato altre opere nel corso degli anni.
2. Un saggio sullo scrivere a mano di un'artista contemporanea.
3. Opere classiche di uno scrittore pioniere e di uno dei massimi rappresentanti del romanticismo italiano (rispettivamente una raccolta di opere teatrali e un saggio contenente 111 riflessioni filosofiche).

Come primo passaggio, ognuno dei membri della giuria ha espresso le sue opinioni su tutte e sei le opere, a cui è seguita una discussione. I criteri con cui si è stabilito il vincitore finale sono sempre quelli su cui si fonda il Premio:

1. resa in giapponese (qualità della traduzione),
2. valore intrinseco dell'opera e importanza della sua introduzione in Giappone,
3. indagine approfondita del testo originale da parte del traduttore.

La discussione è proseguita dopo aver confermato il grado di soddisfazione raggiunto dal lavoro di ciascun candidato alla luce dei tre punti summenzionati e l'orientamento del premio suggerito dai risultati delle ultime tre selezioni.

Tutti i membri della giuria hanno concordato che *Pensieri* di Giacomo Leopardi, nella traduzione di Kunishi Kōsuke, fosse l'opera che più soddisfaceva i tre criteri. Le traduzioni giapponesi di Leopardi sono state presentate al pubblico generale con un libro stampato nel 2006 dalla Nagoya University Press, contenente i *Canti*, tradotti dal professor Waki Isao, e le *Operette Morali*, tradotte dal professor Hashiramoto Motohiko. Di sicuro un passo avanti, ma sempre un libro di 600 pagine per 8000 yen, difficilmente affrontabile dal lettore comune. Pertanto,

dobbiamo constatare come i grandi pensatori italiani rimangano ancora sconosciuti alla maggior parte dei lettori giapponesi.

Tuttavia, in anni recenti un giovane ricercatore ha scritto la sua tesi di dottorato su Leopardi, possiamo quindi dire di essere i testimoni di un cambiamento in positivo ed ora il professor Kunishi ha tradotto interamente i *Pensieri*, opera *post mortem* del poeta e filosofo di Recanati. Siamo sinceramente felici che quest'opera sia ora a portata di mano dei lettori.

I 111 brani registrano, potremmo dire, l'interiorità del poeta e pensatore, mettendone in risalto il lato tragico come il comico, più di quanto non facesse la prosa filosofica tradotta dal professor Hashiramoto, e il professor Kunishi li ha colti con estrema attenzione, addentrandosi nel profondo del pensiero che essi esprimono. Pur rilevandosi dei superamenti e delle riorganizzazioni della struttura originale del testo, non si evidenzia alcun punto in cui essi inficino lo sviluppo delle riflessioni: i componenti della giuria ritengono sia probabilmente questo il più grande pregio della traduzione in esame.

Chiedo solo un momento della vostra pazienza per ricordare un aneddoto personale: nella primavera del 1973 mi fu chiesto del rapporto fra Leopardi, Natsume Sōseki e Akutagawa Ryūnosuke durante una lezione del mio professore, Waki Isao.

Quando ho scoperto le citazioni di Leopardi ne *Il papavero selvatico* di Natsume Sōseki e *Foglie di castagno* di Akutagawa ricordo che corsi a rileggere entrambi i racconti con occhi nuovi. Pur sapendo che si tratta di un sogno irrealizzabile, vorrei tanto poter dire al professor Waki, scomparso nel dicembre 2017, che i semi da lui piantati stanno germogliando.

Chiudo il mio intervento con l'augurio che il professor Kunishi continui a dedicarsi alla traduzione e alla ricerca, e che i risultati dei suoi prossimi studi possano arrivare ai lettori. Mi auguro inoltre che anche alla prossima edizione del Premio vengano inviate molte traduzioni di alto livello.

Prof. Wada Tadahiko (Presidente)

Commenti della giuria

La traduzione, in un giapponese mai pedante, è il risultato di un grande lavoro volto a rendere lo stile peculiare di Giacomo Leopardi, che oscilla tra riflessione e lirica, filosofia e poesia. Ben espresse risultano le sfaccettature della morale dell'autore, a cavallo tra pessimismo e cinismo. La traduzione non è tuttavia priva di punti ostici, dati probabilmente dalla giovane età del traduttore. Ci auguriamo di leggere, in futuro, altri suoi lavori. Inoltre, vorremmo rendere omaggio alla casa editrice, che sostiene la pubblicazione di queste opere poco conosciute.

Prof. Okada Atsuhiko

Le opere candidate al premio di quest'anno si sono distinte per i contenuti interessanti, l'importanza che rivestono nella storia della letteratura e anche per la cura editoriale. Sono molto contento della selezione e ritengo che ciascuno dei candidati meriti una lettura. Tuttavia, il premio deve giudicare la traduzione. La traduzione di Leopardi del professor Kunishi trasmette lo stile, la logica delle frasi, l'umorismo e i paradossi del testo originale. In molti momenti mi sono trovato a pensare come sia una fortuna che proprio il professor Kunishi abbia deciso di tradurre quest'opera. Consiglio anche la lettura dei commenti al testo, in cui il professore svolge egregiamente il ruolo di interprete dei pensieri dell'autore, ma anche quello di rappresentante dei lettori di Leopardi. Vorrei ringraziare infine la casa editrice Genki Shobō, che si impegna attivamente a tradurre classici poco conosciuti.

Prof. Shibata Motoyuki

Il testo vincitore è chiaro e di facile lettura, elemento quest'ultimo su cui il traduttore stesso ha posto molta enfasi. In particolare, considerando le caratteristiche dello stile leopardiano, si può riconoscere l'ingegno con cui è stato affrontato il lavoro: il traduttore ha volutamente diviso le frasi troppo lunghe e ha utilizzato l'opera di Sōseki per discutere l'influenza di Leopardi sulla letteratura giapponese. Se posso permettermi un'osservazione, avrei voluto un approfondimento sui temi di "tolleranza" e "intolleranza", che credo siano estremamente attuali, ma riconosco che non è questo il compito di un lavoro di traduzione. Penso che nel suo insieme sia una traduzione ben bilanciata, che pone attenzione sia al contenuto sia allo stile.

Prof. Noya Fumiaki

Da apprezzare il collegamento tra uno dei grandi maestri della letteratura italiana dell'Ottocento con il contesto giapponese contemporaneo. Oltre alla fedeltà della traduzione, la passione del traduttore nei confronti dell'opera riesce ad avvicinare il lettore giapponese al pensiero di Leopardi. Il talento per la traduzione di opere classiche offre infinite possibilità, ci auguriamo che il professor Kunishi prosegua su questa strada.

Prof. Silvio Vita

Discorso del vincitore

Il mio primo incontro con Leopardi risale a più di 20 anni fa, quando frequentavo il terzo anno di università. All'epoca ero molto più interessato a imparare la lingua italiana di per sé che non la sua letteratura. Lezioni su Dante, Tasso, Galileo (riflettendoci adesso pensatori fondamentali) erano per me meno interessanti delle lezioni di conversazione e di letteratura tenute dai professori madrelingua. Le mie capacità linguistiche di allora non mi permettevano di seguire tutti i contenuti delle lezioni, ma percepivo la passione che il mio professore italiano metteva nell'insegnare, e così facendo appassionava anche me.

Durante le lezioni, il professore parlava di Leopardi con grande ammirazione. Diceva che Leopardi è l'unico poeta nella storia della letteratura italiana a poter essere paragonato, anzi, forse a essere migliore di Petrarca.

Io non sapevo nulla di Leopardi come persona, figurarsi delle sue opere. Finché, un bel giorno, il professore presentò alla classe la famosissima poesia *A Silvia*. Poi chiese proprio a me: “Hai sentito Kunishi? Era come sentire la melodia di una fisarmonica, no? Lo hai percepito?”

Confesso che no, al mio orecchio non sembrava assolutamente la melodia di una fisarmonica, ma sapere che all'orecchio di un italiano suonava tale mi colpì molto. Volevo essere in grado di capire e sentire in questo modo le poesie.

Anche nei due anni successivi non accumulai una grande conoscenza di letteratura italiana. Ricordo che erano molti i passi che non capivo durante la lettura. Per quello ho voluto proseguire con un master e approfondire lo studio della letteratura italiana. Decisi di concentrare la mia ricerca sulle opere del filosofo Benedetto Croce e di continuare per conto mio la lettura di Leopardi. L'inizio del master mi fece sbattere contro un primo muro: ero davvero incapace di tradurre. Ogni volta i professori o gli altri studenti mi facevano notare che le mie traduzioni erano pessime. Fu al momento della discussione della mia tesi di master, credo, che mi imbarazzai molto quando un professore mi chiese “Kunishi, perché traduci così male?”. Mentre dentro di me mugugnavo che non è una cosa che si può capire anche se la chiedi al diretto interessato, provai in ogni caso a pensare al motivo di questa incapacità di tradurre. Poi risposi: “Professore, quando leggo un testo in italiano voglio capire l'italiano stesso, non mi interessa come quella frase potrebbe essere resa in giapponese.”

E fu con questa antipatia per la traduzione dall'italiano al giapponese che proseguii con il master. Nella passeggiata di 20 minuti che mi portava all'università, recitavo tutti i giorni Dante e Leopardi. Forse, in quel periodo, non mi sentivo a mio agio con quell'ambiente universitario. Poi, quando cominciai a

guardarmi un po' attorno, scoprii che esisteva uno *speech contest* a Tokyo. Dato che frequentavo il master dev'essere stato circa 15 anni fa. Arrivai qui all'Istituto Italiano di Cultura e tentai di esprimere i miei pensieri in italiano. Il tema che avevo scelto era il perché la letteratura italiana non fosse conosciuta in Giappone. Se ci penso adesso, non credo fosse un tema particolarmente innovativo per i professori e studiosi di italiano che componevano la giuria. Tuttavia, ricordo di aver ricevuto una buona valutazione dagli insegnanti italiani. Nella sessione di domande dopo il mio discorso, mi chiesero cosa ritenevo necessario fare per diffondere la conoscenza della letteratura italiana in Giappone. Dopo aver riflettuto un po', risposi che sarebbe stato necessario tradurre più opere italiane in giapponese. E il nome di autore che menzionai, forse inconsapevolmente, fu quello di Leopardi. In quegli anni erano appena uscite in un unico volume le traduzioni dei *Canti*, fatta dal professor Waki, e delle *Operette Morali*, fatta dal professor Hashiramoto. Insomma, finalmente nel Ventunesimo secolo erano state tradotte tutte le opere principali di uno degli autori più amati dagli italiani. Decisi che anche le altre opere di Leopardi meritavano una traduzione giapponese. Da quel momento, come studioso di letteratura italiana, decisi che dovevo impegnarmi in prima persona per trasmettere il suo fascino ai lettori giapponesi. Cominciai quindi a studiare e copiare altre traduzioni. Allo stesso tempo, mi esercitavo giornalmente a scrivere e leggevo molte opere di letteratura giapponese. Non mi aveva abbandonato, però, il desiderio di voler capire l'italiano come italiano.

È possibile capire l'italiano come italiano e in qualche modo convertirlo in giapponese? Ciò che mi ha dato un suggerimento per risolvere questo enigma è stato, sorprendentemente, l'atto di scrivere in italiano. Durante il dottorato ho fatto un periodo di studio a Napoli, dove ho avuto molte opportunità di scrivere in italiano. Attraverso quel lavoro ho compreso gradualmente varie caratteristiche della lingua italiana a cui non avevo mai pensato prima. Pensare di scrivere in italiano quando leggi in italiano, prendere consapevolezza che quando scrivi quella stessa cosa in giapponese la devi leggere in giapponese, tradurre mentre fai avanti e indietro tra questi quattro esercizi permette di non fossilizzarsi su una forma fissa e apre la possibilità a una miriade di espressioni differenti. Successivamente, ho riassunto i risultati della ricerca fatta durante il dottorato, ho scritto la mia tesi e sono riuscito a trovare un lavoro presso l'Università di lingue straniere di Kyoto, a cui va la mia gratitudine. Ma durante tutto questo periodo non ho mai pubblicato una traduzione.

Poi, circa tre anni fa, mi hanno invitato a cena. Stavano cercando giovani ricercatori per coinvolgerli nel progetto di una collana editoriale con cui presentare al pubblico giapponese autori europei famosi in patria ma poco conosciuti in

Giappone. Al quel tempo non ero specializzato in Leopardi, ma decisi lo stesso di cimentarmi con una sua opera.

Proposi la traduzione dei *Pensieri* e, con mia profonda gratitudine, l'editore accettò il progetto. Tradurre uno scrittore così amato come Leopardi non è un'impresa che si affronta a cuor leggero ma, dato che non avevo alcuna fama come traduttore, ho potuto lavorare senza troppe preoccupazioni. Tuttavia, quando cominciai seriamente il lavoro, si presentarono subito una serie di difficoltà. Prima di tutto, c'erano alcune parti che non capivo. In secondo luogo, c'erano parti che capivo ma non potevano essere tradotte. Anche arrivando a una traduzione che trasmettesse il significato, il risultato non rendeva giustizia alla prosa elegante di Leopardi. Ma ormai avevo accettato e non mi restava altra scelta se non andare fino in fondo. Dopo aver corretto più e più volte le mie bozze e dopo innumerevoli consulti con l'editor della collana, Nakamura Kentaro, sono finalmente arrivato a un punto in cui sentivo che il mio testo riusciva a "comunicare". Non riusciva a trasmettere del tutto la bellezza dell'opera originale, ma quando Genki Shobō gli ha confezionato una magnifica rilegatura e lo ha pubblicato e messo in libreria, ad aprile di quest'anno, ho sentito una felicità mai provata prima.

Ed eccoci arrivati all'altro giorno, quando ho ricevuto la notizia che il libro aveva vinto il premio Suga Atsuko per la traduzione: sono rimasto molto sorpreso. La mia prima traduzione, un premio così prestigioso? Troppa grazia.

Sono convinto che il raggiungimento di questo risultato sia dovuto esclusivamente alle persone attorno a me. Prima di tutto lo staff della casa editrice Genki Shobō e il mio editor Nakamura Kentaro. Poi, il mio collega di università e stimato studioso Shimoda Yosuke, che mi ha introdotto a questo progetto. Mi spiace non poterli nominare uno per uno, ma ringrazio i professori che mi hanno guidato e corretto durante il master all'Università di Kyoto, tutti gli altri professori e il personale dell'Università di studi stranieri di Kyoto, gli studenti, i membri della *Kansai Italian Studies Society*, indispensabili per stimolare le ricerche sulla letteratura italiana nel Kansai, i professori e i colleghi ricercatori della Associazione di Studi Italiani in Giappone, tra cui Furuta Koji, un punto di riferimento per tutti gli studiosi di Leopardi. E ringrazio più di tutti i miei genitori, mia moglie Makiko, i genitori di mia moglie e il mio amato figlio Kento. Tengo a dire qui che la vita quotidiana con loro è stata per me il più grande supporto.

Infine, mi sembrava giusto congedarmi con qualche parola di Leopardi.

Leopardi è stato anche un traduttore: ha pubblicato la traduzione del secondo libro dell'*Eneide* di Virgilio prima del suo debutto come poeta. Nella prefazione ha scritto una frase memorabile, che ora cito. Immaginatela con *Pensieri* al posto di *Eneide* e "Leopardi" al posto di "Virgilio".

“Lettor mio, dà un’occhiata alla mia traduzione, e se non ti piace, sì baistemma il deturpatore dell’*Eneide*, che sel merita, e gettala via; se t’appaga, danne lode a Virgilio, la cui anima hammi ispirato, anzi ha parlato solo per mia bocca.”

Kunishi Kōsuke